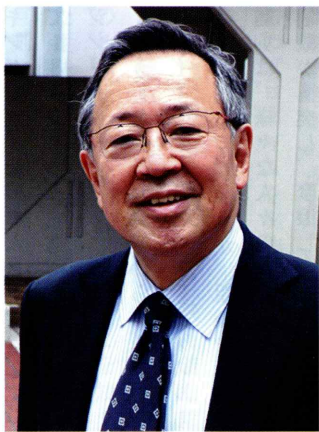




創学は創立者 有木春采先生

## ジェンダーギャップを越えて

国本女子中学校・高等学校校長 坂東修三



共有し、新たな中高の未来図を模索する所存です。

### ホモソーシャルから ダイバーシティへ

さて、本題に入ります。国本女子はその名の通り、女子校ですから、当然、女子や女性に関する話題には関心を向けざるを得ません。次の数字にご注目ください。

1946年—8.4%

2021年—9.9%

この4月から中高の校長に着任しました。国本学園は来年の2022年に創立80周年の節目の年を迎えます。都内の私学の中には、100年以上の歴史を有する私学が少なくないですから、衆目的となるほどの年月ではないですが、80年という歳月はそれなりの矜持を持って公表できる歴史ではないでしょうか。これを契機に、従前の教育活動を総点検し、改めるべきところは臆することなく改める覚悟を教職員で

1946年は、女性の参政権が認められた最初の衆議院選挙における女性議員の比率です。2021年は、現在の女性議員の比率を表しています。つまり、現在の比率は、75年前のものとはほとんど変わっていないことがわかります。国民生活に影響を及ぼす政府の意

(1面の続き)

仲良しクラブ的な《同質社会》ならば、会議はスムーズに進むかもしれません。

ちなみに、東証一部上場企業2160社における女性取締役の割合はなんと1.2%です。女性を排除して物事を決める歴史が一向に改まっていません。政治の分野だけでなく、民間の企業分野でもジェンダーギャップが根深いことを如実に示すデータです。先ほどの《ジェンダーギャップレポート》のランキングでは、他国に大きく劣後している139位という先進国では最低のポジションです。

そうした企業の会議からは進歩や変革、イノベーションやブレイクスルーは生まれるでしょうか。組織や社会の進歩は、様々な人々の異なる意見や価値観が衝突し、摩擦し合う中からしか生まれて来ないのです。

つまり、《ダイバーシティ＝多様性》の中からしか出て来ないのです。企業の中でも、積極的に女性幹部を登用している会社は、多様な意見を取り入れることによって企業の競争力をドンドン高めています。そこで大切なのは、言葉によるコミュニケーション力です。

最近、コロナ禍でのオンラインピク開催に対して賛否の声が大きくなりつつありますが、陸上1万メートルの代表候補で日本記録保持者の新谷仁美（にいや・ひとみ）さんが、「アスリートと



校訓  
一 真心の教育  
一 自然に対する素直  
一 恩を知恩に報ゆる心の教育

### ◆本号の内容◆

- 校長先生ご挨拶
- 副校長先生・教頭先生ご挨拶
- 新任先生ご紹介
- 学園だより  
中学校・高等学校  
小学校  
幼稚園
- 小学校が漢検で全国トップ
- 新任職員ご紹介

思決定に女性が参加できない状態が75年間改善していきなことがわかります。

毎年3月に世界経済フォーラム（WEF）が、各国の状況を調査して、男女平等がどれほど実現しているのかをまとめた《男女格差報告書》ジェンダーギャップレポートを公表し、男女平等の達成度のランキングを発表しています。日本の結果は、世界156ヶ国の中で120位でした。昨年も121位でした。先進7ヶ国（G7）の中では最低で、2006年から毎年行われてきたこの調査で、まだ一度も100位以内に入ることがありません。先ほどの国会議員に女性が占める比率でも、147位というワーストのグループです。

話題としては、やや旧聞に属しますが、2月に東京オリンピック組織委員会の前会長が、「女性がいると会議が長くなる」「女性はわきまなさい」などの発言をして、ごうごうたる非難を浴び、結果として会長を辞めざるを得な

しかしながら、発達段階における中学・高校の課程は、平坦な道のりばかりとはかぎりません。目標が定まらず、何から手を付けていいかわからず、焦りから生活が乱れたり、周囲からの期待に応えられず、自責の念に駆られ、意欲喪失状態に陥ったりすることがあります。中学・高校の時期は失意や不安や迷いの時期でもあるのです。

こんな時、保護者としてもどのように対応したらいいのか、動揺と逡巡を繰り返す日々が続くものです。かく言う私も、二人の女子を育てた経験に照らせば、決してひと様に指南できる立場ではありません。迷走する子供以上に、内心は動揺して浮足立っていたのが実情でした。子供がどんな理由から苦悩しているのか、保護者としてどんなアドバイスを与えるのが適切なのか、答えの出ない問いを繰り返す困惑の連続でした。

そんな窮状の中で、出合ったのが《共存》という言葉です。これは、臨床心理学から出てきた言葉ですが、簡潔に言えば《親離れ—子離れ》できない親子の関係を《共存》と呼びます。自立とは、先ず「親離れ」が第一歩ですが、「親離れ」は「子離れ」とセットになっています。今日の先進社会では、子供が親への依存を断ち切るだけでは自立は達成できません。依存体質の子供をケアすることによって心の安寧を得る保護者もま

くなりました。

この方は、おそらく会議は男性だけで、異論を唱える人が誰もいない会議だけを経験してきたのだと思います。いちいち言葉で意見を言わなくても、「心伝心」「阿吽の呼吸」でみんなが「空気を読んで」それぞれ「付度」しながら、なんとなく結論やコンセンサスに到達できたのです。《以心伝心》《阿吽の呼吸》《空気を読む》《付度》、どれもこれも言葉が必要としないコミュニケーションです。

これは、《ムラ社会》《村落共同体》に特有のコミュニケーションです。その意味では、日本社会はまさに《ムラ社会》の体質が、意思疎通を規制するコードとして今日でも温存されている社会と言えます。似た者同士の、男性だけが集まっている集団や組織を社会学では《ホモソーシャル》、日本語で《同質社会》と呼びます。たしかに、似た者同士の

(2面に続く)

た、ある意味で依存症なのです。

育児に時間と労力を費やすことが出来るのは、相対的に恵まれた環境に置かれていると言えますが、とすれば、そうした環境の中では、《過干渉・過接触・過保護》に陥って、子供との心理的距離を必要以上に縮める場合があります。親が子供の自立を妨げてしまうのです。その結果、子供を《依存—干渉》のループに閉じ込めてしまうことにながってしまいます。

諭えが適切ではないかもしれませんが、陸上競技場のトラックを走っているランナーが、疲労からフラフラと迷走し始めたからといって、コーチがトラックに入って鞭を飛ばしながら伴走することは、禁止手以外の何ものでもありません。

精神科医の斎藤環（さいとう・たまき）氏は、保護者に対して「手をかけずに目をかけよ」、つまり《見守る》姿勢を説いています。故事に做えば、教育の要諦は、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えることだ」になるのかもしれません。

子育ての場合でも、子供が躓いて、もがき苦しむ場面があっても、本人が自力で立ち上がれるかどうかを保護者側で、じっと忍耐をもつて見極める時間を持つ必要があります。手を差し伸べるのは、その後からでも遅くはないのです。こ一考頂ければ幸いです。